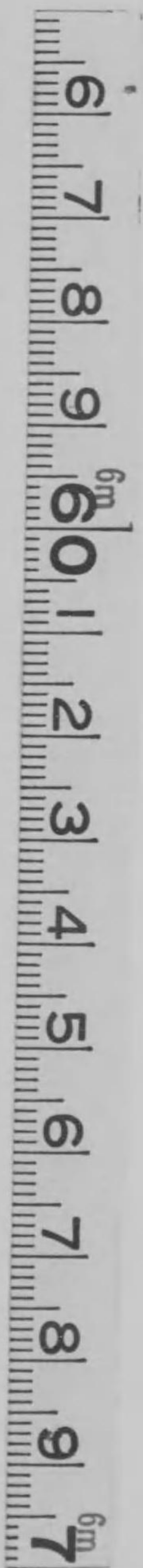


393

2761

妙義之峻山嶺  
附近之遊覽地  
全

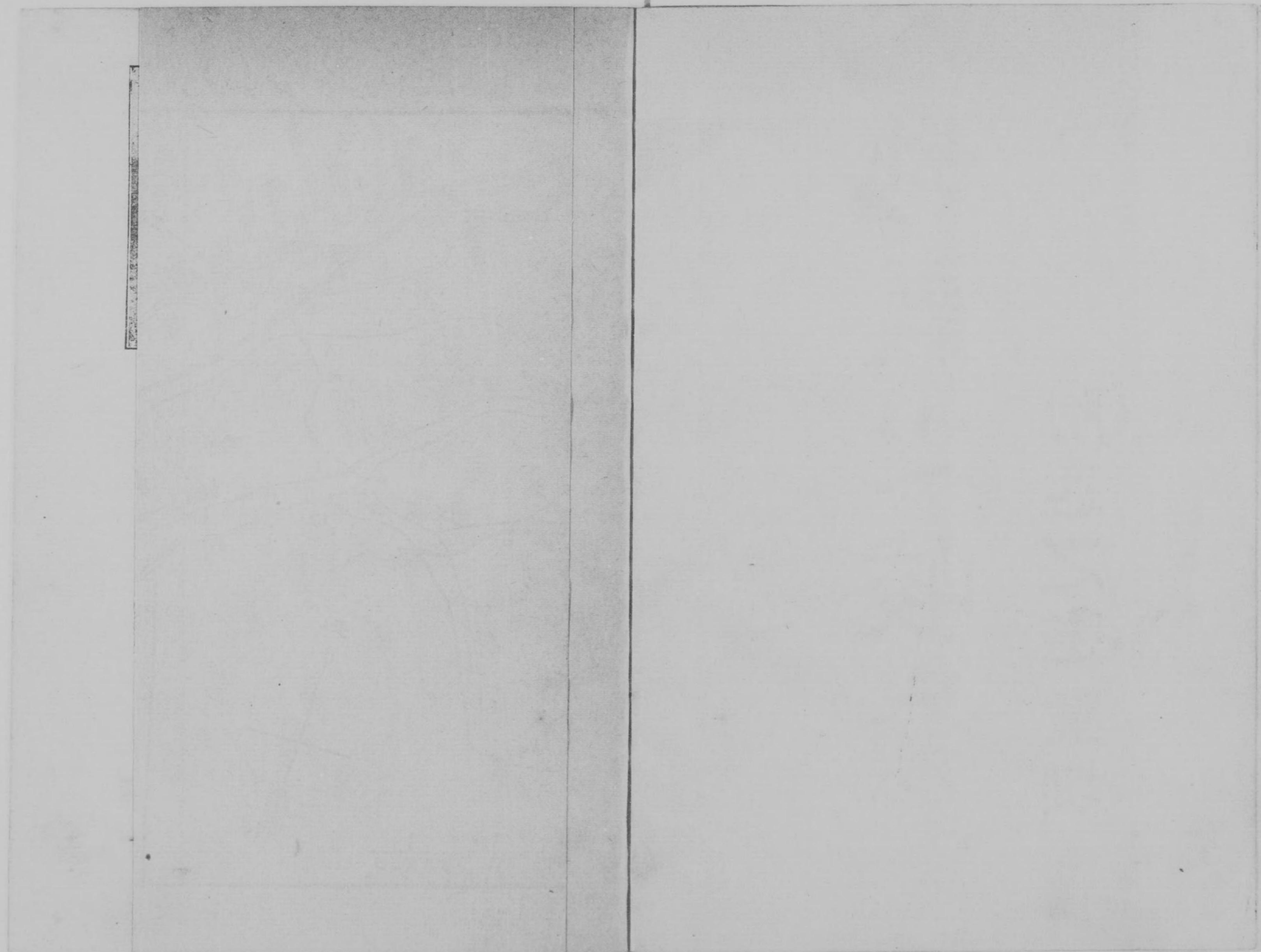


始



妙義之峻嶺

附近之遊覽地



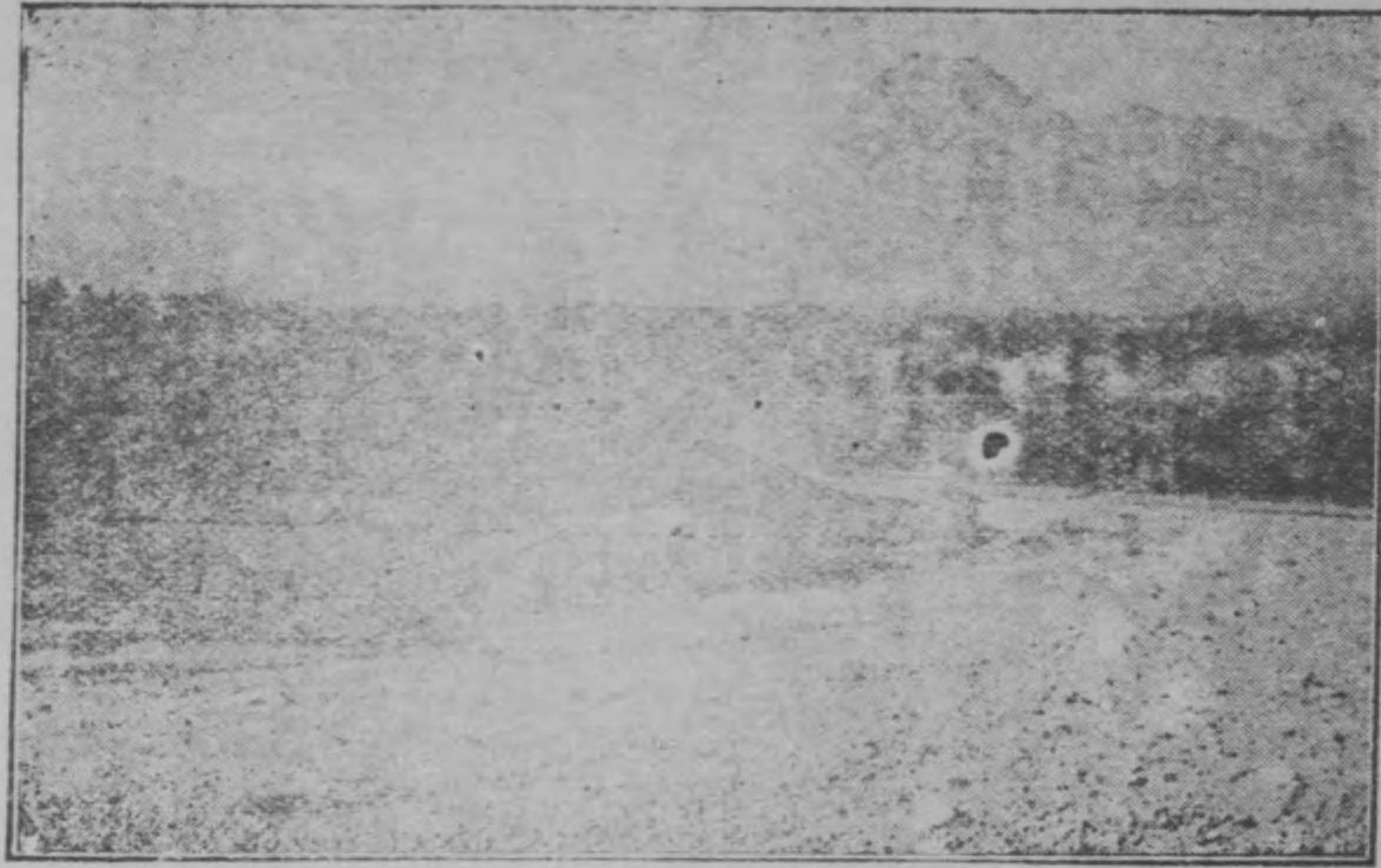
# 妙義附近略圖



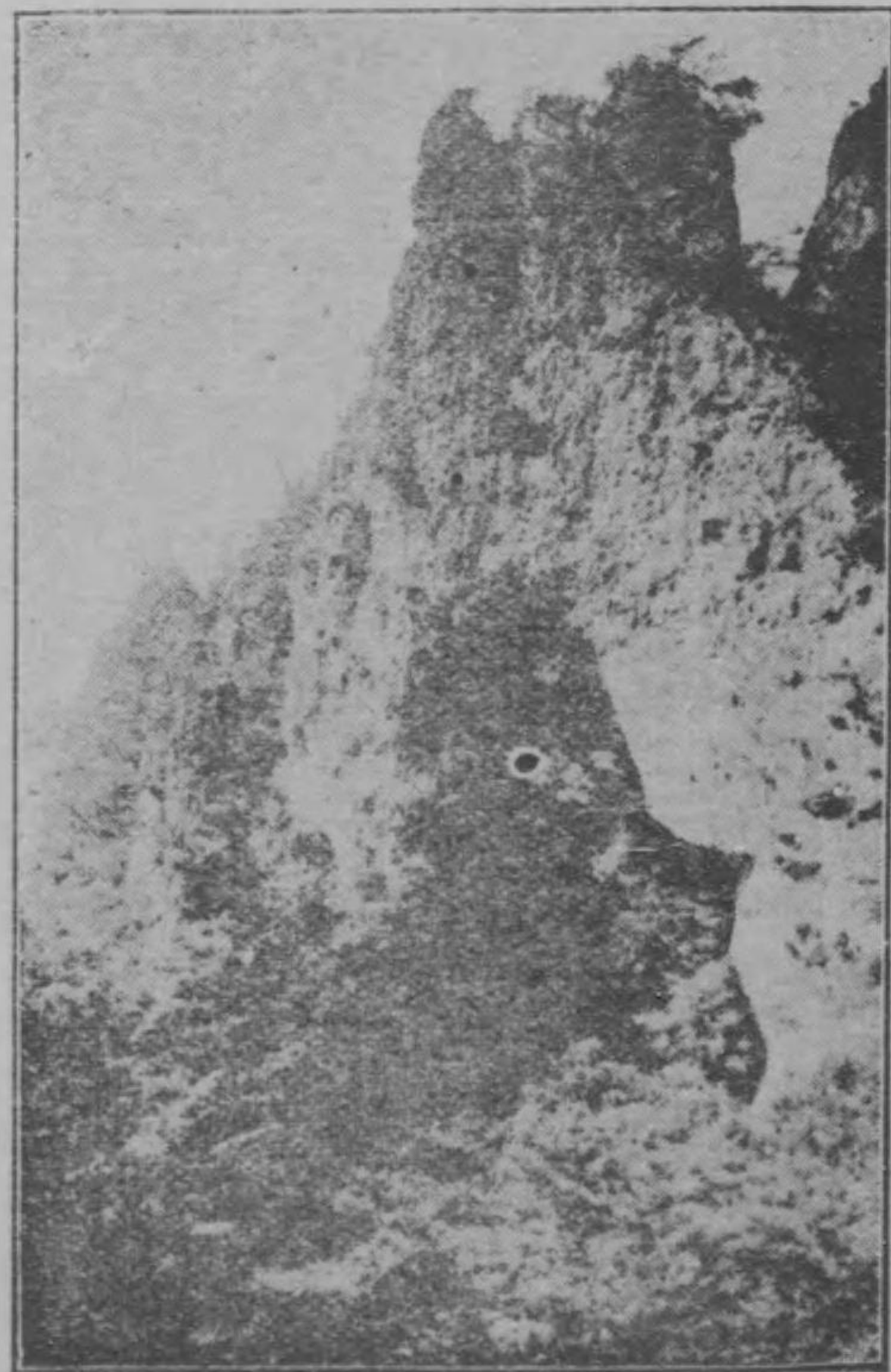
例	〰	〰	〰	〰
神社	町	鑛泉	河川	道路
・ 独立標高尺	△ 三角尺	× 峠	文學校	停車場

1  
50000





山義妙るた見りよ田井松



門石一第山洞金



妙義町全景



金洞山第二石門



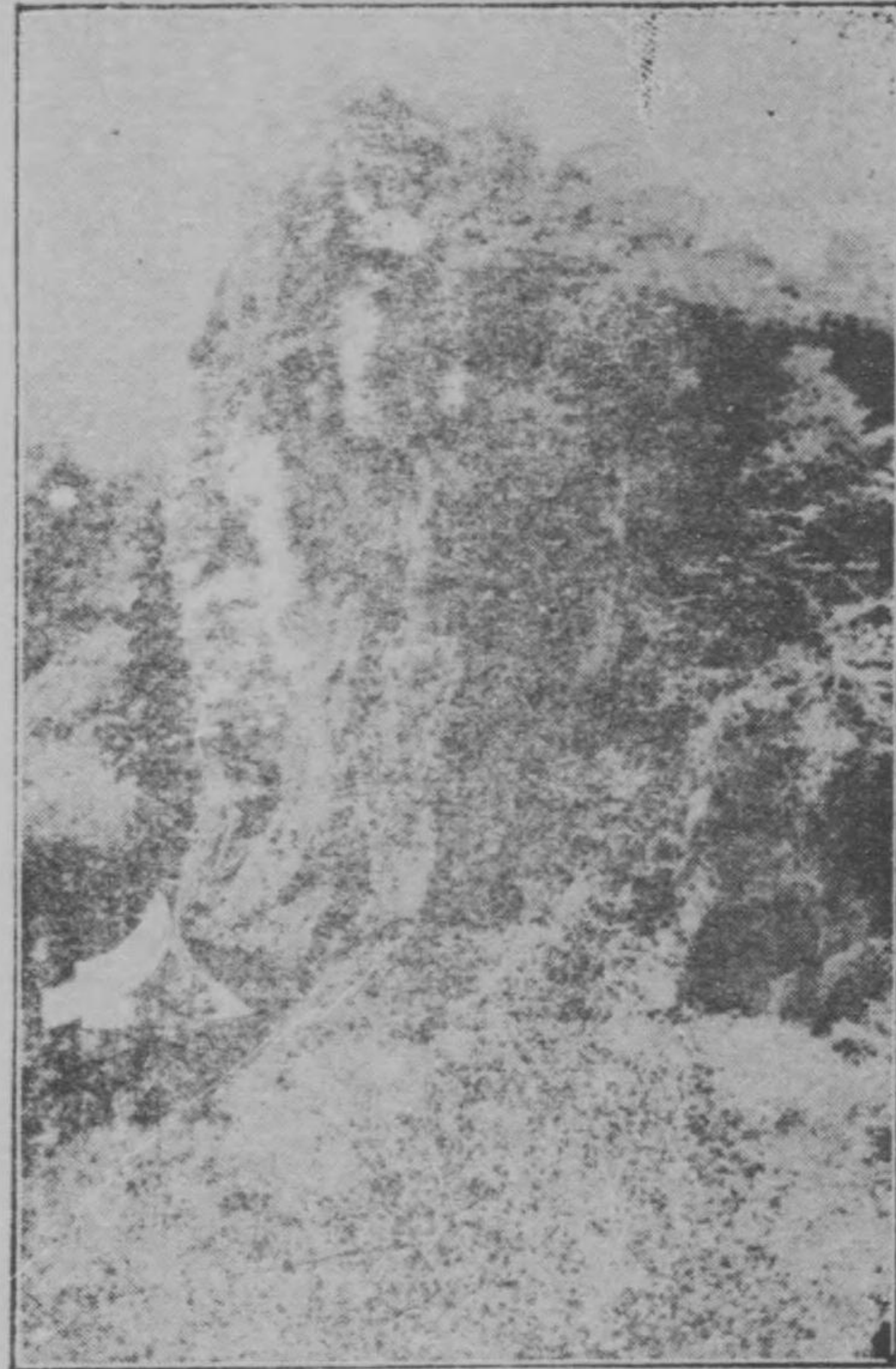
金洞山鏡岩



岩動及岩砲大山洞金



岩所座御山鷄金



金洞山朝日岳の側面



磯部鐵泉場の一部



393-2761

序

予は妙義山麓に住む一農民である、置く霜白き且鍬を肩に野に出づるの時、先目に入るものは妙義の峻峰である、一日の業を終へて家路に急ぐの時、夕餉の煙に閉されて淡き影を殘すは妙義の秀嶺である、此天地自然の風光は予の慰安者であり又先導者である、終日の勞苦は常に之れによりて醫せられ、日常の業務は之れによりて奮勵せられるのである、斯くの如く予は心身共終生この恩恵に浴するの偉大なるを覺え深く感謝に絶えず、こゝに於てか妙義の正勝、金交の絶景等汎く天下に告げ、以てこの恩澤に報いんと企圖したわけである、その後大関の折國は先輩諸士の高説に基き或は里老の傳に聽きて略稿を終へた次第であるが、妙義神社につきは特に當時社司たりし故直井三郎氏の厚き御助力を賜はり是に初めて本書が呱呱の聲を擧ぐるに至つたので末尾ではあるが直井氏をはじめ先輩諸氏に對しこの御援助の勞を深く感謝する次第である

編者識

目次

一、總説……………一  
位置及境域 成因 交通、附花月園 四季の折々

一、生物界……………五  
動物 植物

一、名産……………六

一、山案内……………六

一、妙義町……………七

一、妙義山中の名勝及遊覽地……………八  
白雲山 大の宇 白雲山の裏山 妙義神社 菅原神社 波已曾神社 小  
澤葡萄園 一本杉金洞舎 金洞山 中之嶽神社 金鷄山 御嶽神社 鑛山

城山

一、附近の名勝及遊覽地……………二九

- 松井田 新堀 八幡宮 諏訪神社 伊勢義盛屋敷跡 碓氷峠 熊ノ平
- 碓氷神社 坂本 碓氷關跡 百合若大臣足跡岩 横野の董 磯部鑛泉
- 磯部城址 仙石碑 磯部公園 佐々木盛綱の墓 大野九郎兵衛之墓

妙義總説



●位置及境域 高崎線より信越線に移る頃、西方遙に山頂鋸齒状を呈して削立せる峰巒を見る、之即ち妙義山にして漸次西するに従ひ山影鮮かに、磯部驛附近より既に山腹に白く「大」の字の描出するを、望み見るを得べし、妙義山は、上野國北甘樂郡の西北に起り、その北麓は碓氷郡の西南に亘れる峰巒の總稱にて、我が上毛二山中、最も西に偏し、松井田驛の西、碓氷峠の東南に在りて、北は碓氷川を隔て、鼻曲火山の餘脈に對し、西南は西牧川を隔て、荒船火山に面し西北は中木川をばさんで中木山に接し、東南は第三期層を介して大桁山に連なる臺状の火山なるも削剝作用に因りて頗る奇景を呈し、人をして一見火山たるを疑はしむ、今、中仙道より之を望めば、全山、白雲、金洞、金鶏の三峰に分れ略鼎立の姿なれども、その右なるは白雲、左なるは金鶏にして、其中間なるは即ち金洞山にて里俗之を中之嶽と呼ぶ、妙義とは白雲山の別名として呼びたるも、今は衆峰の統名たり。

妙義山の地域は二郡五ヶ町村に亘るも、上毛二山中最も狭く、僅に方二里、長徑二里に過ぎ、その高距といへども四千尺に足りざれば大山高嶽と云ふ能はざるも百來名山として世に稱せら

る、所以のものは、即ちその山容の奇態異状を呈するによるなり。

●成因 妙義山は碓氷川の西南部と西牧川の東北部との間に介在する第三期層に屬する凝灰岩と凝灰質泥板岩層の上に發育したるものにして、其山骨の火山岩よりなり、全山三峰に分れて略半圓形に灣曲せる事實より推考せば、赤城、榛名の如く其中央の窪地より噴出して成りたる一獨立火山には非ざるかの觀あれども、學者の説によれば、大桁山は全く一の獨立火山なれども、妙義はその西北部より西南部に亘りて存する諸山となせる一個の火山群にして、此火山群の中央に近き處に存在する窪地は即ち舊時の噴火口なり、故に往時遠く之を望めば秀麗なる缺尖圓錐形なりしも、爆裂作用と、生成以來風雨の浸蝕作用とによりて漸次山体は削磨せられ遂に今日の奇態を呈するに至りしものにて、今の妙義山は即ちその火口壁の一部なりと云ふ、妙義山が斯の如く奇巖怪石を有するは全く之を構成する岩石の性質によるものにして、即ち板狀若くは柱狀節理を呈する輝石富士岩の熔岩と、輝石富士岩質の集塊熔岩とより成るによるなり。

●交通 上野驛よりするも、長野よりするも、四時間餘にして松井田驛に着するを得べし、故に方今各地より清遊するもの年を追ふて増加す、磯部驛に下車せば、道程約二里、人力車、

自動車の便あり、松井田驛よりすれば一里餘、同じく人力車、自動車等の設けあり、然れども問道、即ち松井田停車場より、直に南行、碓氷川を涉れば二十餘町にして妙義町に到着し得べし、問道は秋に至れば、村民の假橋を架して、觀楓各の便を圖る、此頃ほひ客は主として此間道を経、悠々清流を涉り岸邊、花月園の梨に渴を醫し、パノラマの如き四圍の景に見とれつ、靜かに歩を移せば何時かはや妙義の地を踏むに至る。

□附、花月園第一園 松井田驛より妙義に至る徑路、碓氷川の南岸に在りて梨葡萄を栽培す、面積數段歩に過す北に傾斜せる砂質壤土にして梨栽培に適す、規模小なりといへども、美味を以て聞ゆその位置、高燥形勝の地を占め、背に妙義の錦繡を負ひ、放眸遮るものなく、眺望殊によろしく、遠く平野を隔て、赤城、榛名の諸嶺を望み、脚下又碓氷清流の蜨々として横たはるありて、風光眞に畫が如く、言語に絶するものあり特に中秋三五の月の空高くすめる風光の如き特筆すべき所なり、觀楓登山の砌一度は必ず見舞ふべき所爲り。

第二園 妙義黒門の東方約二町、園の傍に休憩所を設く、あたりの風光、第一園を凌ぐの概あり汗をぬくひて、澁茶一服、梨に舌つとみうつ、亦一興なり

◎四季の折々 妙義の地たるや、海を抜くこと一千餘米突の高處、夏にして三伏の暑なく、處によりては蚊帳の要を認めず、冬は西方一帶山を廻らし、地形東に傾くを以て、日當りよく且寒風を防ぐを以て暖かなり。

春風ゆるやかに若葉もえ出る頃ほひ、山骨を若草が縫ふた油繪の様な景を背に、淡き緑色に包まれたる廣野の上に立てば、遠近の山々は或は青く、或は紫に、末は遠く霞のもやの海に消えて、何處からともなく聞ゆる鶏犬の聲に、一層のせけさを増、何時しか一幅の畫中の人となるを覺ゆ。

やがて葉櫻の期もすぎ、青葉がくれにホト、ギス啼く頃となれば、緑鮮かなそが中に眞紅の躑躅散在して、切たてた斷崖に藤波の覗くも又一しほの風情あり。

桐の一葉に涼しさを覺ゆれば全山紅葉して或は紅、或は黄、或は紫、或は橙と錦繡は峰より溪へ、溪より峰へ織なされ、其美觀他に類を見ず、老若を問はず、遠近を問はず、登山するもの引もきらず、日々數千人を下らず。

前日來の降雪やんで野も山も一面の銀世界、眞白き衣着たる妙義の岩山、高く天をついて立てるに、うらくとさしのほる朝日影の映する朝晴の雪景は如何に神々しからん。

### 生物界

著名のもの數種のみを左に記載す

◎動物 佛法僧、十一位鳥、ホト、ギス、ウグヒス、カケス、キツ、キ、キジ、山鳥、ハト等の外に種々の鳴禽類多し

猿、ムササビ(一名オカツキ)モ、ンガ(一名ノブスマ)河鹿、等

◎植物 コイハザクラ、ウメバチサウ(一名バイクワサウ)

エゾスミレ(一名エイガンズミレ、又ニホヒスミレ)カタクリ(一名カタコユリ)キミカゲサウ(一名スズラン)クマガイサウ、アツモリサウ、セキコク、ウテウラン、サクラサウ、ウメガササウ、イハタバコ、フタバアフヒ、ヒメイチゲ、ダイヤモンドサウ、シハイスミレ、イガリサウ、エンレイサウ、マイヅルサウ、エビネラン、スズラン、フユノハナソラビ、ミヤマウラシロ、シ、ガシラ、クジヤクシダ、メウキシダ(當山特有のもの)等

### 名産

名産として數ふる程のものなし、桃、梨、葡萄、栗等の果物類及之等の加工品なる羊羹、果酒等とす

### 山 案 内

妙義三山の山案内は妙義山案内組合なるものあり、希望者は旅館又は休憩所へ依頼すべきなり殊に始めての登山者は山中、危険の個所多きにより、案内者を雇ふを得策とす

□附妙義町より各地への里程

- 一、白雲山大の字まで 十五町 一、中の岳社務所へ 一里十町
- 一、同奥の院へ 二十五町 一、金鶏山頂へ 二里半
- 一、同頂上へ 五十町 一、松井出驛へ 一里八町
- 一、小澤葡萄園へ 十五町 (近路約二十五町)
- 一、一本杉金洞舎へ 一里 一、磯部鑛泉へ 二里
- 一、菅原天満宮へ 一里 一、榛名神社へ 七里
- 富岡町へ 三里半 一、伊香保へ 九里

- 一、高崎市へ 六里 一、赤城出大洞へ 十六里
- 一、三峰山へ 二十二里 一、輕井澤へ 七里
- 一、前橋市へ 八里 一、淺間山へ 十一里餘

### 妙 義 町

黒門坂を上りて行くに左側に農商務省山林局妙義森林測候所あり、その門前の木標によれば北緯三十六度十八分、東經百三十八度四十六分、海拔千四百一十一尺とあり、以てその位置と高さを知るに足る、現時は北甘樂郡に屬すれども本國帳に碓氷郡波己曾明神と載しもの諸戸に存する所より見れば往時は碓氷郡の管する所たりしものならん、維新前は信州善光寺への裏街道に當り一名女街道と稱す、これ碓氷の關所を過ぐる表街道に對しての名なり、當時表街道の婦人通行に八釜しかりしたため自然此の裏街道を妙義に出本宿より信州岩村田に出たるなり、又三峰參詣の人々は妙義より吉井を経たるにより獨り妙義參詣者のみならず、通行の人々も此處に一宿せしかば大に賑ひて、戸口二百有餘、旅館十戸、妓樓十數戸もありたれど維新後妓樓廢止と及妙義神社と東叡山との關係絶えしとにより、漸次衰頽し今は僅に往來の兩側にその殘礎を

認むるのみなり、又中の嶽道の竹林の邊を禰宜町と呼ぶこれ維新前此處に御師即ち祝家のありし所なり、又黒門坂下を梨の木と云ふ、妙義町繁榮を極めし當時は此處にも町家軒を並べたりしと云ふ今に竹敷中に墓地、古井、水溜、石垣等を残す、町は妙義神社の社領に屬し町の入口三ヶ處に門を設け、大門は即ち富岡通りにて茲に白門を建て、松井田通りの入口は今の黒門坂にて黒門を建て信州裏街道の入口なる禰宜町には赤門を建し由なるが今は昔昔語りとなりて唯黒門坂に黒門のみその名残を止む、戸数は今は減じて三十餘戸となりしも、近年登山熱の勃興に伴ひ、四季の觀光及避暑の士人次第にその數を増殊に秋期紅葉の期に至りては觀光客の來往織るが如き盛況を見るに至れり。

### 妙義山中の名勝及遊覽地

①白雲山 其の東麓に妙義神社を奉祀す、古來此峰を妙義山と呼たるも今は妙義とは三山の總稱に用ひらる、全山略三峰に分れ通俗、白雲山の絶頂と呼ぶものを鷹戻しと云ひ、最も北に位して海拔千〇八十一米突ありと云ふ、その西南にありて金洞山に接する峰を相馬嶽と云ふ、

此二峰の間なるを鼓ヶ嶽と云ひ、共に急峻を極め登攀甚だ困難なり山頂の巖上に石祠を安置す鼓ヶ嶽は一に天狗嶽とも呼び山頂最も廣く又石祠を安置す、相馬嶽は三峰中最も高く、眺望、妙義嶽峰中に冠たるものなり、峰頂に祠なく、三角標點を存す、標高一千一百〇三米餘あり

②大の字 白雲山の中腹に在り、岩石の突出したる上の平面數坪の處に岩に穴を堀三本の柱を建て竹を以て大の字形に組七五三繩を張り之に三角に疊たる御札半紙を差したるものなり、その由来詳ならずと雖も、妙義神社はもと妙義大権現と稱したれば大権現の大の字を象りたるものにして中仙道往來の人々に大権現の所在を示したる目標ならんと云ふ、傍に石の小祠あり登るに些したる危険もなく老人、婦女子と雖もよく攀登る、妙義神社側より數十分に於て到るを得べし、眺望頗る優秀にして關東平野眼前に展開す、此處より少し上れば奥の院に到る岩窟ありて神祠を設け石神を安置す危険の個所多きにより山頂を極めんと欲せば北麓又は裏山よりするを可とす。尙本山中の奇勝を擧ぐれば左の如し

鶯の瀧、日暮の瀧（庚申の瀧とも呼ぶ）瓢箪穴、獅子岩、船岩、辨天の窟、天狗の評定場、鳩胸、大矢筈、屏風岩、犬戻し、龍立の巖窟

③白雲山の裏山 未だ知る人少きも、亦見逃し難き場所なり、筆立岩、人形岩、十の字岩、

石割の瀧（一名出臍の瀧）鉄岩、獅子岩等の奇勝幾多の洞門ありて金洞の風致を凌ぐ趣あり  
◎妙義神社 北甘樂郡妙義町、白雲山の東麓に鎮座します、祭神は日本武尊にして岩長  
姫命、仁生大神、菅原神大納言長親公を配祀す社記に里老相傳へて上古日本武尊當國に幸  
してわざはひを攘ひ人民を助くるの勳功最も多くのみならずいみじき奇瑞を示し賜へるに因つ  
て白雲山に社を建て波己曾神と稱へ奉れるなりといへるよし 宣化天皇、二年に鎮座せりと  
記されたり、申すも畏れけり日本武尊は神性武く雄々しくおはしませる故に西東の荒ぶる賊徒  
を悉く服従せしめ賜へり仍て其功名を傳へんとして恒に御供つかへまつりし者に居地を賜ひ  
名づけて建部といふ今もさる地名諸國に多かるよし記傳に見えたり、是に就いて思ひよれる事  
あり此妙義町はもと岳村といへるよし岳村は分れて今は別なり岳村の岳は武の借字にて即ち往  
古の武部なるべし、こゝに續きたる村落の名も亦由あるべき所ありそは大牛村は小碓か行田は  
童男田にや、また（日本記に小碓尊又名日本童男と見ゆ）また岳村は武部の事長かはた尊の御  
裔なきの住みませし所ならんか、尙諸戸といへる村あり是は室田なき同じく所謂昔の神田神戸  
の名殘にして即ち今の社領なれば此邊に神戸を名のるの多かるは、さる由あればこそ存するな  
れ然れば武部といへりしことはいと廣かりけんと思はる傳へて村名とよく相符合していかにも

由縁ある所とす。

後上野志云 妙義大権現は白雲山と云ふ、別當石塔寺、在昔は新田長樂寺の末寺なりしが、近  
世に至り江戸東叡山元光院の長清法印、之を兼帯してより大に繁昌し神威も熾になりしより、  
長清を當寺の中興とす長清の墳墓は當山下の坊（金洞山にもあり）にあり、名跡志云、妙義大  
権現の別當本坊は白雲山高顯院石塔寺と號す堯惠の北國紀行佐野船橋の條に「西の方一筋平な  
る岡あり、上に白雲山、荒船のミヤシロ」云々是妙義の物に見えし始めなり、  
三代實錄貞觀云々一宮巡詣記に「上野岡妙喜村法性房止面にあり波己曾神社右方にすえおきて  
今は末社の如くなりまた土人の話に此の社昔は正面にありしが今は借家しておもやとらるゝ清  
水の地主の如しといへり後人明魏を妙喜と誤りまた天狗となす笑ふべし」と見え  
文貞公事蹟考に右大將華山院長親暉南山の皇威不振を憂へ上野國に住みたまひて明魏また耕雲  
山人と號し假名反切義解耕雲傳等を著し給ひぬ宗良親王に歌道を學びて其泳歌世に傳はれり身  
退き給ひし後神と崇む今の妙義権現是なり」とあるにても知られ且社記に長親暉波己曾社を信  
じたまふこと一かたならず且美德おはしければ配せ祀れるよし見えたり、さればもとは暉の名  
なるが後には社をいふことになり又山の名にも所の名にもなれるなり



隱窓隨筆には花山院右近衛大將長親雅斐して妙魏と稱ふ此の人を妙喜と誤れるなるべしと云ふ  
南巡行錄云、明德五年故の南、後龜山院に尊號をすゝめ、上天皇と稱し奉る其の年にや  
花山院右大將長親卿も出家し給ひ、耕雲と號し給ふ、又かねて字を以て明魏とも稱せり、長親  
卿は歌道を以て世に知られ給へり、永享中に勅撰ありし新續古今集に長親卿を以て明魏法師と  
書たりしを沙門契沖評して「いかに南朝につかへ給ひし人なればとて右大將まで昇り給ひし人  
をかく書けることは心なき撰者かな」と云へり、三代實錄に「貞觀元年三月十六日壬午授上野  
國正六位上破胡曾の太神に従五位下、元慶三年閏十月四日庚寅授上野國從五位下破胡曾太神從  
五位上、同年五月二十日戌寅授上野國正五位上破胡曾勳二等」とあり、上野國神名帳には從  
二位破胡曾明神とあり此の社を妙義と云ふは明和七年小野竹叢と云ふ人温古隨筆に花山院右近  
衛大將長親卿、白雲山の邊に來り明魏と改む、後人、明魏を妙義と誤る往昔明魏と稱する所以  
は明々魏々たる奇秀明媚を愛でて名づけたるものならん、上野名跡考云、妙義は尊意僧正を祀  
る元享釋書に尊意、姓は丹生氏、平安城の人なり其先、應神天皇の後胤なりと見ゆ、今斯に丹  
生村あり此の地に上古丹生氏の者住して其の祖先なるを以て茲に祀りしものなるべしと云ふ  
以上の事項より考ふるも、中古以上のことは甚だ不明なれど、近古上野東叡山宮家の御隱居所

として皇室の御崇敬厚く、殊に東叡山御親祭の神社にして別當高顯院是心院石塔寺は御留守居  
と稱へしこと、維新前上野東叡山に妙義神社を祭祀したる社殿と妙義役所のありしこと等の事  
實より考ふるも、上野東叡山との關係の深かりしは、想像するに餘あり、又徳川幕府は年々玉  
串を奉納し、當山より一品公辨親王の御親筆に係る「妙義大權現」と書し摺りものに、東叡山  
の印を押幅として献納する例にて、幕府は之を諸侯に頒ち與へたる由なり、尙家光將軍は神領  
三十石の御朱印を寄進し、家綱將軍は、特旨を以て山林二十町八反十三歩を寄進せられしなり  
斯の如く幕府の崇敬も厚く從つて衆庶の信仰は殊に深かりき社殿に往古破己曾神と稱へし頃は  
式外の官社に屬し、頗る宏壯美麗なるものなりしが、中古衰微したるを建武の朝に花山院長親  
公改築せられ、慶長七年、葉山左衛門、中根七藏に命じて改築せしめてより、今日の宏壯優美  
なる建物となりたる由なり、又別當職高顯院の建物は東叡山の宮と御兼帶の宮殿とし且御隱居  
所とせられたり、御隱居所は十二間四方八棟造りにして、極めて立派なるものなりしが、嘉永  
年間祝鳩の殃禍を被り灰燼に歸し嘉永五年再建せしものにして、今の長光閣これなり長光閣は  
往年北白川宮殿下の御命名にて又白雲閣とも云ひ、棟續きの社務所をも總括して里人は單に御  
殿と呼ぶ

妙義神社の祭日は一月元旦、及初卯、二の卯とし、例祭は舊時は九月九日なりしを近時便宜、四月十五日及十月九日に改む、儀式としては往古は兩部神道にして東叡山の宮御親祭なりしを以て種々の儀式あるも、今は神社祭式により、儀式なし

○神○社○と○大○手○氏○ 神社の今日あるは、磯部鑛泉鳳來館主故大手万平及息字佐吉兩氏の勞、預かて力あるを記憶せざるべからず、明治維新前、時の地頭の酷政を憤り、菅原村故茂木百太郎氏等の同志と相謀りて、訴訟を起し、身命を賭して江戸に到り遂に宿望を達し、民をして、塗炭の苦より逃れしめたるが如き、又神社の衰頹を嘆きて、時の社司後任問題につき東奔西走席の暖まる暇なきが如き將亦、官有林を拂ひ下で寄進する等の如き、舉げて數ふべからず、當時神社より同氏に贈りし表賞狀に見るも其の功績の偉大なるを知るべし

表 賞 狀

白雲山妙義神社は欽明天皇の御宇の創立にして光仁天皇寶龜季年に再興し現在の社殿は後西院天皇の明暦二年に建立せしものにして莊嚴美を盡し構造頗る善を極め當時繁榮隆昌なる實に至れりと云ふべし、然るに世移り歳を経るに従ひ漸々衰頹を來し明治維新に際し時々改革、社領

及社有の山林は境内を除くの外、上地と相成剩へ別當、社務所等の建物は一個人の有に屬し神事祭典にも差閤を醸し不都合の次第、然るに舊神社々有の山林當時官有地境内に接續の立木拂下げ伐採の令違有是際し該森林の妙義山佳景風致及び水源土砂打止に重要な關係を有するを以て貴殿等はれが主唱となり該森林禁伐を官廳に請願し遂に禁伐林に編入せられたり尙進で舊神社附屬の山林建物等を白井幸次郎より取戻し神社の所有に歸したるは全く貴殿等率先盡力の功に依りてなり實に當社が永遠維持の基礎を確立し茲に衰頹挽回するの端緒を開き當社の幸福不過是因て功績を既窮に垂れ是れを永く彰明し當社の紀念として此表賞を贈呈する所如件

明治二十六年九月二十日

妙 義 神 社 社務所之印

- 右 祠 官 關 口 六 合 雄 ㊦
- 氏 子 總 代 岡 部 吉 太 郎 ㊦
- 全 片 山 藤 作 ㊦
- 全 松 本 久 松 ㊦

磯 部 村  
大 手 字 佐 吉 殿

山林永世貸渡契約證

上野國北甘樂郡妙義町大字御殿第四番

一、山林貳町五反參畝拾八步

同國同郡同町大字大手村幸澤五百四十六番地

一、山林五町六反四畝拾壹步

同國同郡同町大字同村五百四十七番地

一、山林壹町貳反參畝拾九步

同國碓氷郡松井田町大字新堀村字源ヶ原千六百五十九番

一、山林六反六畝貳拾五步

右山林は妙義神社接續の森林にして數百年來曾て伐木せしこと無き妙義山の佳景風致に關係し又高田川及猫澤の二水源にして土砂打止となり最も必要の森林にして關係各村之れが伐木を憂ひ罷在候處貴殿主として禁伐を其筋に請願し盡力の結果本年拾月參拾日附を以て該山林四筆國土保安の爲め禁伐林に編入相成依而妙義山の風景及水源涵養土砂打止め等永世の安全加ふるに

白井幸次郎所有の地所參拾筆、同建物通稱御殿及附屬の家屋六棟（沿作疊建具、座敷掛額面共悉皆有形の儘也）今般白井より妙義神社へ寄附社有財産と相成候も貴殿の盡力且又前記の山林四筆は貴殿と白井と賣買契約相成居候處解約の上該地所を悉皆妙義神社へ寄附社有と相成候も貴殿が私利を捨て當社の公益に厚なるは今更言を俟たざるなり今回貴殿の盡力莫へなるは玆々深く感佩の至りに候依而前書の上山林四筆は無地料にして永世貴殿へ貸渡申候處確實也然る上は自今以後該地所は貴殿の御隨意に使用可被成候後日山林貸渡契約證仍て如件

但し 該山林は方今免租地に有之候得共爾來有租地に相成候際は租税公費共貴殿より出金吾等受取支拂可申約束事

右は氏子一同熟議の上につき我等總代として連署候也

明治二十五年十一月十五日

社務所  
之印

妙義神社祠官	關口六台雄印
氏子總代人	岡部吉太郎印
同	片山藤作印
同	松本久松印

磯部村  
大手字佐吉殿

□妙義神社の什寶を擧ぐれば左の如し

一、貞宮殿下御下賜品三點、明治三十一年夏、宮樣御殿御滞在の砌の御玩具にして東都へ御還啓の折の御下賜品なり、名工の作

一品公遵親王御直筆額 一面

一品公辨親王御直筆額 一面

共に奉納年月不詳

神祇伯資訓王御直筆額 一面

明治元年十一月八日奉納額現時本社正面に掲ぐ

照高院宮御詠筆和歌掛物 一幅

青蓮院宮御染筆東照宮御名號掛物 一幅

百合若大臣の弓及矢 弓長八尺矢長四尺五寸 共に銅鐵製

一、八大龍王の鈴 尊意僧正の所持品にして往古より秘藏のもの

一、鈴、傳に云ふ 傳教大師の所持したるものにして支那より傳はりしもの

一、獨鈷、傳に曰、傳教大師の所持品、金銀張り分け名工の作なりと

一、山院寺号、二品良尙親王の筆

一、藥師の名号、一品公辨親王筆

一、鳳凰の羽、大鳥の卵、馴鹿の角、河馬の牙

以上四點は傳來由緒不詳、上野東叡山の宮の御寄進

一、和歌の色紙 聖護院宮御筆

一、白雲山の圖 狩野右京時信の筆

一、觀音の像 探幽齋の筆

一、山水壽老人の圖 狩野探幽の筆

一、木の實の念珠 印度菩提樹の實にて作り、法性坊の所持のもの

一、白雲山の詩 黃檗湖音の書

一、紺紙金泥 盤若心經、弘法大師御染筆

一、古代の石劍 傳に曰、日本武尊の御愛品にして破胡曾の太神の本殿に往古よりありしものにて一時妙壽神社の御神體となせしことありと云ふ

一、鈴 傳に曰、傳教大師の所持したるものにて、支那より來れるものなりといふ鈴虫の鈴

と云ひ妙音あり

- 一、二王の像 二王門の雛形にして運慶の作なりと云ふ
- 一、五色の寶珠
- 一、白雲山の詩 梶井宮盛胤親王の筆
- 一、妙義大權現 一品公辨親王筆
- 一、紺地金泥心經 傳に曰く、慈惠大師の筆
- 一、不動尊の像 傳に曰く、巨勢金岡の筆
- 一、心經 僧空海の筆
- 一、曼荼羅 筆者傳來不詳、五百年前のものなりといふ
- 一、梟の圖 徳川家綱將軍の筆
- 一、地藏緣起の圖 土佐將監光信の筆
- 一、觀音の像 常信の筆
- 一、瀟湘八景の圖 狩野永眞の筆
- 一、觀音龍虎の圖 宮崎重政の筆

一、裝飾の太刀 磯部大手萬平氏の寄進せるものなり

◎神苑 總坪六三九八坪甚だ廣濶にして、老杉、鬱蒼として繁り高く雲表に聳え金碧朱楹の妙匠を隠見す、盛夏酷暑の候と雖も、此處にありては肌粟を生ず、古くより、皇族、朝野名士の來遊せるもの多く、殿下御手植の樹木、名士の献木、寄進せる燈籠等、其數多く、何れも皆神苑の中に在り、又兒島高德の献詠碑及燈籠あり「こゝろさし立る願を〇〇なびく此の白雲の山にいのらん」の和歌を刻す、碑面青苔に隠れ且缺字あれば四五字讀みがたし、もし三句は「うち」にはあらぬかと

一等侍補 佐々木高行

踏みわけて入らむよしなき身なれとも山のゆかしき峯の白雲

高崎正風

かく人の筆を巧みと思ひしは此山水を知らぬなりけり

◎菅原神社 俗に天神様と云ふ妙義町菅原、金鷄山の東麓に在り、村社にして菅原道真公を

祀る天歷四年の創建にして年々三月二十五日を例祭日となす、社傳に曰く、菅公二十五歳の時自ら二十五歳の像と、七才の像とを彫刻し、一体は河内國道明寺に納め、七歳像の一体は上野國天沼の里に送らる、今の神体之なり、天曆四年二月、天沼の里を名づけて菅原村と稱へ、一寺を建立せり、即ち天沼山菅應寺是なりしが明治元年廢寺となる、

◎波己曾神社 今妙義山の下諸戸に在り、方俗相傳へて妙喜權現祠の地主神と爲す、名跡志曰、諸戸村に今波胡蘇明神あり、之れは三代實錄に「貞觀元年授上野國正六位上波己曾神」とあり、上野國神名帳「碓氷郡の中に從二位波己曾明神」と見ゆ給へり古は此あたりも碓氷郡にてやありけん、今は額に正一位波胡蘇大明神（石の華表の石額には波己曾神社とあり）と見ゆ、いつの頃、文字を書かへけるにや、かくしばく神位も進み玉へるに、いかで延喜の神名式にはもれ給ひけむ、古語拾遺に「至天平年中、勸造神帳、中臣更權、任意取捨、有田者小祀列、既縁者入社猶廢」といふをも見侍れば延喜の御時もさることなきにて載玉はざるにはあらぬか、神祇志料云「波己曾神は今白雲山に在り、故に白雲山神社と云ひ又武尊權現とも申す傳へ云ふ妙義權現地主神なり」と「神社の傍に御葦島とて葦のみ生ずる所あり、此物は神の甚しく憂ひ給ふ故に手に觸るゝもの忽ちに罰を受くと此説いと鄙びたるが如く聞ゆれ日本武尊

の葦を白鹿に擲ちてその過を免かれ給へる故事に出しなるべし武尊の神とは當國にて所々に祭る、中にも利根郡保高山に在るを根本に推さる

◎小澤葡萄園 妙義より中の嶽に至る途に在り、小澤氏の經營にかゝる、葡萄、梨、桃、梅等の果樹を栽培す、茶店の設けありて、名産羊羹、果酒を製造販賣す金洞登山者の休憩所たり

◎一本杉金洞舎 大公園金洞山大部分の所有地たる柴垣氏、此處に居宅を構へて金洞舎と呼ぶ、小澤葡萄園より流汗淋漓急坂を登れば、一本杉見晴らし金洞舎に至る、露臺に腰うちかければ、小娘の茶を吸み來るあり、此處に於て眞に茶の味を知る遊茶にのきをうるほし汗を拭ひて亭によれば、眺望絶佳、流れは細く、長く、白くして、蛇の横たはるが如し、森や民家の三々五々を點する様は恰も碧空の星を見るが如し、近くは榛名、赤城の諸山より遠くは常陸筑

波山に至るまで皆 前山中に集まる、こゝより約十町にして武尊の祠に至る、山勢の奇秀なる漸次此邊より加はる

◎金洞山 妙義の中岳にして山勢の最も奇秀なる所なり、妙義白雲山の名は稍中世より起れども金洞の名はさのみ久しからず蓋妙義白雲の名を以て諸峰と兼括し、金洞金鷄の名を分つに及ばざりし也澤氏曰く、道士長清金洞を開くは百年前に在りと即ち元祿中の事となす、而も山

峰の神異近世の諸遊客金洞を推し其第一とす、

上信日記云、金洞は中の嶽と稱へらる麓より登り十町許に入憩はす草屋あり、又上るに怪しき岩さもこ、ら立てり天柱峰、天燭峰、筆頭峰など云ふ、又三十町ばかり上れば第一の門に到る見上ければ廣さ凡そ十餘間門の姿にして山なり、山の形にして自然の嶽なり亦北の門を通りぬけて五六町行きて武尊權現の社に到りぬ大黒天の御堂きら／＼し又二町ばかり登りて三峽の橋と名づけ、岩の上をわたる、大岩のめぐりをめぐりて鬼のひけすりと云ふ岩のもとに出大岩の二つならびた間、七八寸もあきたらんと思ふ間を二丈ばかりのぼりてその岩の上に出ことに立る巖は大山尊に似たり、さて大日嶽といふこ、より鬼面石、大黒岩、地藏岩などよく見ゆ何れも四五丈ばかりありぬべし、さて武尊の御社に下り又案内する人をやどひて、東の嶺にわけ入に足のたつもとなし、かしろの上に生か、りたる木の枝ををらへてつたひ下るに一足もふみたがへば千尋の谷に落入なましと心もきゆること幾たびと云ふことなし、第二の門に到る一の門にくらぶれば、三つが一つの大ききなり近くより見て又もとの道へかへる、又たに二つ越ゆれば第三の石門に到る、これも同じ大ききなり、又わけ／＼て四の門に到る廣きこと一の門に倍せり、このあたり實にこの世の境とは見えす、我が身、いつの間に仙人に身をかへけん

と思はる、大黒岩自然の形の誠に入の手を借て削り作りたらんやうなり高さ十餘丈あるべし、其外鬼の閨、天狗岩、地藏岩、血池谷などまことさること、思はる、予ひまをぬすみて近き國々をば經めぐり見しことたび／＼なれどか、る山の景はいまだ早お碓氷坂、堀切坂、くりから坂入相の瀧などはるかに見ゆわけ／＼て妙義山に出ぬ云々

竹中遊記云、凡そ山に貴ぶ所の者肉にあらずして骨に在り肉豊なりと雖も凡そ山たるを免かれず唯骨多し故に石壁峭拔奇態横生是金洞の勝天下に冠たる所以なり今砥澤より下仁田を經東北溪に循ふ榛棘葬々として人を没し天將に暮れんとす金洞を望むに唯秀崖千仞雲表に縹緲たる而已夜岩高寺に投じて宿す寺は山腹に在り唯嵐疊緑、人の衣枕を壓し夢魂も亦冷なり次日寺後より級を躋り武尊の祠に謁す洞あり金洞窟と云ふ洞外は絶壁空に徹す長清道士の碑を置く道士は開山の祖たり事載て碑中に在り愈登る石背欲側し半圮橋の如し之を渡れば巨石倚疊折裂合せず縫衣の綻びたる若く腹石に貼して而して其背に出髪皆摩す、之を摩鬚岩と云ふ、大日峯その上に在り、眺望頗る豁、金剛峰と云ひ彌陀峽と曰ふ、轟々臚列して排戰聯甲の如し、天狗岡と云ひ鬼面岩と云ふ、奇醜争ひ出高僧誦呪、百鬼踰伏するが如し、天燭峯と曰ふ、卓立綠燭の如し、天柱岩といふ空を刺し柱梁に類す除峰頂に座す、四山の勝威萃る猫將軍車上に坐し而し

て三軍の兵士環向して命を聴くが如き也。兩峰の觀既に終る乃東峰に登る石門竝立數十丈なるを見る、是第一門となす門内より過ぐ亂崖・巖簇小祠あり、既にして第二門を得たり、形偏倚半彎の明月の如し、第三門は甚だ高からず而して廣さ數人を入、第四門は洞然豁大數間の屋の如し、門外は絶壁に望み俯して視るに底無し、奇崖之を遶り或は歇、或は直、或は俯、或は仰梯の如く、飛橋の如く挺芝餅筍の如く詭態異狀應接之が爲に暇あらず、自飛翔の鳥奔逸の採となり絶嶽窮谷、一時偏く到らざるを恨む耳、風方に至り搖り落ちんと欲す、乃ち下る、里餘妙義祠を得たり噫金洞の山たる甚だ大なるにはあらず、而して秀削絶特、寸崖卷石と雖も皆平凡に超絶す譬ば猶高士名流の皮膚毛孔一點塵俗の氣無きが如き也、天下の山其誰か此に媿づる無き焉

金洞山中名勝を擧ぐれば左の如し

- 大石門 第一石門 穴の高き十丈、巾八尺 第二石門 穴の高き四丈、巾一丈五尺  
第三石門 穴の高八尺、巾一丈二尺 第四石門 穴の高八丈、巾九丈三尺  
第五星穴 穴の高十丈、巾九尺 第六射貫穴 穴の高五丈、巾二丈  
小石門 東胎内の穴 女婦岩の穴 蜂室の穴 鳥越の穴

動搖岩の穴 鼓岩の穴 科戸の穴 阿波岩の穴 西胎内の穴  
東部の奇巖及勝地

- 東仙人窟 奥三丈經 丈二尺、蛇窟屋入口より出口まで七間  
古屋詰崖 大小二ヶ所、東三狹橋、蟻の戸渡り、鷲の岩  
大蠟燭岩 龜岩、筆頭岩、御花鳥、虎岩、東大黒岩  
天狗臺 夜見の岩、大砲岩、動搖岩、身曾貴岩、觀物峯、菅公硯水窟、御鏡岩

西部奇峰勝景

- 金洞巖(金洞窟)奥八尺經一丈、西大黒岩、鬚摺岩、二見岩、西三峽橋、烏帽子岩  
阿波の岩、八丈ヶ岩窟、朝日嶽(高二百八十尺)轟岩、鞍掛岩、九曲岩、玉綾の瀧  
(高十丈餘) 八萬地獄、血の池

◎中之嶽神社 金洞山嶺中の所謂中之岳の麓に祀り今は小坂村の村社に屬す祭神は前宮に大國主命奥宮に日本武尊を奉祀す例祭は初子祭を一月初子日に養蠶祭を四月廿五日に大祭は十一月十五日に行ふ古老の傳によれば上古日本武尊御東征の砌、此山の妖賊を退治せられしかば後村民等その垂跡を慕ひまつりて小祠を建たるに創まり其後嵯峨帝の御代弘法大師登山して



大國主命を齋きまつる壽永年間、藤原祐胤創めて祠堂を建立せり後継出信長の時、北條氏の臣加藤長清此山に來り終養せしを本郡小幡城主織田筑前守深く之に歸依して戰國擾亂の際に尙廢頽せる堂宇を再興せり、後松平攝津守の封を此地に移すや當山を祈願所として巨額の資を投じて壯嚴なる殿堂を建築せしかき文久三年火災にかゝり全部灰燼に歸り當時人を摩して齋者たりし老松古杉皆枯れたりといふその後領主の出資によりて再建せられたるも明治十五年三月荒船山に興りたる山火災は烈風に乗じて飛火し當山亦烏有に歸せり、現今の祠堂は後社掌工藤氏の經營に成れるものなるが出資者なき今日なれば今は昔の面影もなき有様なり、當山に弘法大師の奉齋せる大國主命所謂大黒天の木像は其後幾度か改造せられし由なるがその御影は最初と變りなく右手に利劍を持する奇形なるものなり本社奥宮の傍に長清道士の碑と墳墓あり八丈が窟は道士の穴居の跡なりと傳ふ又道士は齡百四十八歳を保てりと云ふ。

◎金鷄山 金洞の東、南北に狭く、東西に長くわたれる山嶺の稱にして山骨は白雲金洞と同じく熔岩と集塊熔岩とよりなる最高點は僅に海拔八百九十一米に過ぎ、全形、鷄の頭冠に似たるを以て此名あり、山中筆頭山、子持岩、御嶽、樋等の奇勝あり、就中樋は金鷄山東端御嶽の奥宮に至る間にあり、左右斷崖絶壁馬の背の如く而も峻嶒にして岩窟にたよりて登る、一た

び足すべらせば千仞の谷底に落つ、登る者其危険なるに恐れて腋下に汗す山中の奇巖勝景を舉ぐれば左の如し

筆頭山(天燭峰)子持岩、挾岩、劔ヶ峯、氷至ヶ岳風穴、帆立岩、蟹の四道、乾瀧、馬の脊渡り、親不知、鞍またぎ、頬摺り、山狭の橋、髭摺岩、

◎御嶽神社 金鷄の東麓に在り、大字菅原に屬す、近年拜殿社務所等を里に移したれば唯社殿のみを存す。

◎鑛山 金鷄の東端の山腹に在り、僅少の黄銅鑛を産す金色を呈するにより古人は金と思ひて採屈せしが今は廢鑛となりて其跡を存するのみ。

◎城山 金鷄山の東端に在り里老傳へて高田氏の城址なりと云ふ。

### 附近の名勝及遊覽地

◎松井田 今新堀村を併せ松井田町と云ふ、人口約五千、鐵道は町の南を過ぐ、中仙道驛次安中と坂本の間とす、太平記中、先代峰起の條に安中松枝の驛名見ゆ、名跡志云、松井田又松枝と書し一驛也、平治物語に「義經上野國松井田といふ所に一宿して家主の男を見るに、大剛

のものを見ゆれば主従の約をなす、伊勢の國のものなり、伊勢三郎義盛と名のる」云々曾我物語に頼朝卿其夜は松井田に宿り給ふ」又「上野國松井田三百町愛甲三郎に給ふ」なき載たり、前上野志に松井田に學校の跡あり、承和二年小野篁之を建たりと傳ふ、今の貞松山崇徳寺が之なりと而し其小野氏の建學といふこと疑はし、上野國學生料稻一万束とも載すれば此地に學校ありしも知るべからず。

◎新堀 今松井田町の管内なれど西に離る、松井田停車場の所在地なり、松井田城址あり新堀の名は即ち城壕に起れるものとす、名跡志云武田三代記松井田の城主安中越前守は嫡子左近の練をも許容せず籠城す、永祿六年二月廿六日武田信玄六頭を差向けて攻むるによく防戦打つて出ることを三度終に叶はず降る云々、松井田城は新城に在り武田没落後天正十年七月より小田原持となりて大道寺駿河守政繁居住、同十八年五月四日落城、城主切腹、息新四郎降参、此時城破却せらる、甲陽軍鑑云永祿六年松枝の安中越前守押詰められ降参すと雖も早く侘びざる故御成敗、城代には小宮山丹後を指置かる管窺武鑑云、天正十年信玄公より上野を瀧川一益に下さる其後六月一益は上洛前に小田原へ當り一軍仕懸くべしと武藏國へ打つて出、松井田の城には人質を預け同苗彦次郎を差置くる大道寺駿河守の墳墓は補陀寺境内に在り、碑面に「爽炫院

殿光月淨大居士」の法名を記し碑陰の碑文を刻す、

◎八幡宮 松井田町中央の北側に鎮座まします、譽田別命、神功皇后玉依姫神を祀る創建年月不詳、建久年間頼朝公淺間三原野卷狩の際當社に休息せられしと傳ふ、

◎諏訪神社 新堀に鎮座永正七年諏訪但馬守宮所居住の際信州諏訪明神を勸請したるものと傳ふ、建御名方神、八坂刀賣神を祀る、當社西方澤中に神足石と呼ぶ奇石あり、建御名方神の遺跡なりと傳ふ、

◎伊勢義盛屋敷跡 松井田町舊泉福寺の在りし處に義盛の父神來義連の居住したる所と里人之を傳ふ、

◎碓氷峠 群馬長野の國境に當る峻嶺にして夙に紅葉を以て聞ゆ、山路は坂本驛より起り新舊道あり新道は南は鐵道信越線に沿ふて走り舊道は新道の北部に廻りて峠町權現祠を經るもので曲折回轉登路甚だ困難なり、新道は明治十一年、聖上北國御巡幸の砌、之を改修尙十六年更に改修せらる鐵道は同廿六年山路七哩の間、廿六個の隧道を穿ち、ラックレールを敷設（軌道公配平均十五分の一）シアプト式機關車を運轉して運輸交通の便を圖るに到る而るに今や横川に火力發電所を設けて之に代ふるに電氣機關車を用ふるに到れり、

●熊の平 碓氷嶺中の一車驛なり觀楓の季節には乗降客織るが如し、

●碓氷神社 縣社にして碓氷嶺頂、舊道峠町に有、俗に權現と云ひ熊野神を祀る中央に伊那那美命東に速十男命西は事解男命を祀る、東の社殿は群馬縣に在り、西は長野縣に屬す、華表石燈籠、隨神門等皆兩縣に跨る神樂殿は明治十一年聖上北陸御巡狩の時、駐輦所に充てさせらる、境内に日本武尊が橘姫を歎せさせ給ひたる遺蹟に尊を祀り若宮日本武神社に號す、碓氷眞光の塚は神社の北方眞光林中に在り、

●坂本 坂本宿、原、峠町、入山、北野牧を併せて坂本と云ふ宿は即ち古驛の址にして昔は箱根の小田原に於るが如く上下の人馬停留の地にして人馬喧囂、諸侯龍槍の影一日も絶ゆることなく、旅亭甚だ壯大に娼家列りて頗る賑ひたるも鐵路の開通と廢娼とによりて近年全く荒涼の山村に變ぜり、横川驛の西南一里、入山は妙義の西に當り、溪山の奇勝頗る賞すべきものあり、碓氷妙義の近く之を壓するあれば人に顧みられず、又坂本の西北に霧積温泉あり火傷等に効ありと云ふ、

●唯水關址 臼井町大字横川の西端に在り、木曾路關會に之横川には看街樓あり、碓氷の御關所と云ふ、女切手、鐵砲の御改め(俗に出女入鐵砲と云ふ)あり、大日本地名辭書に云、按

横川、峠町兩所の碓氷關は近世安中藩之を守り、中仙道の要塞と爲せり、是専ら江戸幕府の時なるが古代にも碓氷關あり已に將軍記に「軍攻者足柄、碓氷、國二關、常禦坂東」と載せ、三代格には「相摸國、足柄坂、上野國碓氷坂、置關、勸過の昌泰二年官符を収めたり、其の關柵は、此の山中何地なりしにや、興廢の沿革詳ならずとあり」此關所新設年代は不明なれども徳川氏が此地東海道箱根と並立して關門要害の場處として守らしめたるは事實なり、

●百合若大臣足跡岩 木曾路關會云、坂本宿より松井田まで二里半耳道の側の百合若大臣の足跡石あり、又射貫岩とて峰に岩穴見ゆるなり貝原益軒の曰く、百合若大臣と云ふ人古書にも見えず、日本武尊を誤りてかく云ふ歟、豊後筑前にも百合若の古跡あり世の傳へには嵯峨帝の御宇、四條左大臣公光の子百合若大臣、九州の惣司として下向云々、蜀山人、壬戌紀行云坂本驛を出又人家あり原村といふ、藥師坂を下り川久保橋をわたりて横川の關あり村を過て左に社二つあり山の岨を左にし川を右に行くに川の向ひに黒き岩山二つばかり峠あり坂を下りて左の岨に足の踵の形してくほく穿てる石あり、俗に百合若大臣の足跡石と云ふ、右のさかしき岩山に穴二つあり、西なるは大に東なるは小さしこれは射ぬけ山とて百合若の射ぬきし跡(百合若の用ひし鐵製の弓矢は今妙義神社に奉納し有り)なき輿かくもの、かたるもおかし明月峽の

たぐひなるべし、天和年中撰江戸雜記紫の一本云、大多橋は大多ほつちがかけたる橋の由傳ふ四谷新町の先笹塚の手前なり肥後國八代郡の内に百合若塚あり塚の上に大木あり百合若は賤しきものなり大臣と云ふは大人なり大太と云ふ、大人にて大力ありて強弓をひきよく礮を打つ今大太ほつちと云ふは百合若のことほつちとは礮のことなりとぞ一とせ大風にて右の塚の上の大木たふれて崩れたる中からうとあり、内を見るに常の人の首四つ五つ合せたるほぎの首あり不し識なりと見るうちに雪霜の如く消失せぬ、依つて大なる卒都婆をたて右の様子をかきつけて塚の上にたてる其卒都婆今にありとぞ、百合若は筑紫の人にて玄海ヶ島に於て鬼を平ぐること百合若の舞に見えたり然るに奥州の島の中に百合若島と云ふありて見とり丸と云ふ鷹の事まで髓にある島ありとぞ又上州妙義山の道にも百合若の足跡矢の跡とてあり此外にも大太ほつちが足跡、力業の跡爰かしこに在り。

◎横野の董 碓氷甘樂の郡界東西四里に渉れる山野を横野原と云ふ後上野志に眞光寺原一名人見原を横野と云ふ妙義の麓なりと古來ヨジレ花、董の名所として傳へらる名跡志曰横野は八雲御抄に見えて上野國の名所と注せらる行囊抄には佐波郡玉村の邊を横野となし玉の横野と稱ふ此と別地也と

山 家 集 西 行

董咲く横野のつばな生れぬれば思ひノ一に人通ふなり

◎磯部鑛泉 碓氷郡磯部村の西方西上磯部にあり信越線磯部停車場を距る西北約二町運輸交通共に頗る便利なる處なり鑛泉は鹽の窪に湧出し泉源ニヶ所あり一はその發見年月不詳なれども東鑑に記載しあるより見るも往古より存在せるは疑ひなし他泉は弘化四年信州地震の際の湧出とも傳へ或は天明三年淺間山噴出の時始めて湧出せりとも云ふ、本泉の治病に偉大なる効あることは年已に久しく泉質は炭酸泉にして温度攝氏十六度六なり明治十七年中仙道鐵道布設の舉ありて以來日に月に榮に貴顯紳士の別荘を始め旅館、茶亭、商家、擔を連ねて今日の繁盛を見るに到れり之鳳來館主故大手万平氏の勞の賜物といふべし

産物としては「ラヂウム」鑛泉湯の花、磯部鑛泉サイダー、齒磨き粉原料、磯部煉瓦、鑛泉應用菓子類等とす

◎逕部城址 俗に城山と云ひ停車場より東南數町にある小丘なり佐々木高綱の兄盛綱の築く

所と云ふ高さ十有餘丈周圍七八町許頂きは平坦にして樹木繁茂すその舊跡として見るべきも二三石垣の存するのみ明治廿一年地方有志相謀りて公園となし山下に櫻樹を植つ、春は櫻花爛漫として綻ひ秋は満山悉く紅葉して錦千段を織成すの壯觀を呈す、東鑑に盛綱と磯部との關係見ゆ新葉集に讀人知らずとして一首

山路よりいそへの里にけふはきて

うらめつらしきたひ衣哉

◎仙石碑 藥師堂の上に在り小學上野志に磯部村大字西上磯部村の北字鹽の久保に仙石因幡守久俊の碑あり、此地も其封邑也、地灌漑の利なく唯僅に雨水の澤によりて耕雲をなすことを得るのみ、若夫雨なくんば旱魃忽ち到り野に青草なきを例とす久俊之を患ひ寛文中碓氷川を引て田用水となし民をして其澤に浴せしめんことを請ひ其允許を受け、溝渠長さ一千五百餘間を穿つ是より後水旱の患ひなし民歡呼して曰く、河水東流して庶種苜蓿に登り、永く當年艱阻の患ひを免かれしめたるは一に公の賜なりと即ち嘉永五年爲に廟を建て其功績を石に勒せりと。

◎磯部公園 停車場より約一町園内に村社赤城神社鎮座す社域には老杉繁茂し周圍に櫻樹躑

躑等を植ふ、西北は碓氷の清流に望み鑛泉地を眼下に遠く妙義の淡影淺間の噴煙を見る此地舊井上伯の別邸たりし處なるが後原市の人半田善四郎氏の所有に歸せしを當地の有志謀りて借地し明治四十年公園となし花木を補植し石を置ベンチ、亭を設けて浴客の逍遙に便にす一度園中の人ならんか櫻綻ぶ陽春の頃に到れば園内皆花に埋もれて老若男女織るが如く花吹雪を送らる、二味の音には何時か心も立ちて手の舞足の踏む所を知らず、風に藤波さはぐ頃、赤城公園の躑躅は新緑中に眞紅の波を漂はせ遠近人の杖を引くもの數知れず花の下碓氷の斷崖に坐せば清き流れは足下に鑛泉地は淡き葉櫻の中に見えかくれ西にはかすめる空にうす紫に染なされたる妙義山その右の端には藍色に彩る淺間の高くほの白う煙を吐くも見ゆ清風徐に來りてうた、仙境に在るの想ひあらしむ

◎佐々木盛綱之墓 鑛泉地の東方約十町磯明山松岸寺に呼ぶ寺あり墓はこの堂宇の左側に在り、明治廿年元老院議員黒田清綱氏傍に一碑を建て次の一首を刻す

題佐々木盛綱古墳 正三位源清綱

ありし世のほまれと共に不朽してしるしの石の残りけるか雨

盛綱は近江の人佐々木秀義の三男なり當地に居りしこと東鑑に明かなるも大日本史(盛綱晩年に願蓮房と稱し越前福井に眞宗寺を建て住せし由記しあればこの地に墳墓のあるは稍疑はしきも武家系圖に子孫尙當地に住したる由記載しあれば蓋その歿後子孫の此處に建たるものなるやも知れず

◎大野九郎兵衛之墓 松岸寺内別に在り九郎兵衛は播州赤穂の臣なりしが主家歿落後當地に來り手習ひ師匠となり後入道して遊謙と號し當所にて歿したりと傳ふ、眞偽詳ならず。

皇族殿下貴  
紳高等官其  
他の御投宿  
不絶有之年  
々御客數増  
加仕候

一等旅館

文化元年創業  
妙義山突當り左側角  
養氣館

ひし屋傳平

松井田停車場前ニ支店ノ設アリ弊館ハ  
眺望無比、寢具清潔懇切丁寧ヲ旨トス  
山案内人差出申候

盛綱は近江の人佐々木秀義の三男なり當地に居りしこと東鑑に明かなるも大日本史「盛綱晩年に願蓮房と稱し越前福井に眞宗寺を建て住せし由」記しあればこの地に墳墓のあるは稍疑はしきも武家系圖に子孫向當地に住したる由記載しあれば蓋その歿後子孫の此處に建たるものなるやも知れず

●大野九郎兵衛之墓 松岸寺内別に在り九郎兵衛は播州赤穂の臣なりしが主家歿落後當地に來り手習ひ師匠となり後入道して遊謙と號し當所にて歿したりと傳ふ、眞偽詳ならず。

皇族殿下貴  
紳高等官共  
他の御投宿  
不絶有之年  
々御客數増  
加仕候

一 等 旅 館

文化元年創業  
妙義山突當り左側角

養氣館

ひし屋傳平

松井田停車場前ニ支店ノ設アリ弊館ハ  
眺望無比、寢具清潔懇切丁寧ヲ旨トス  
山案内人差出申候

本館ハ妙義山町ノ高地  
 ニ有之四季ノ眺望ハ曩  
 ニ大町桂月先生關東隨  
 一ト激賞有之候何卒御  
 登山ノ節ハ御投宿アラ  
 ンコトヲ奉希上候

上州妙義山ニ王門前

中之嶽入口

御休泊  
 旅館

東雲館

中之嶽石門御案内所

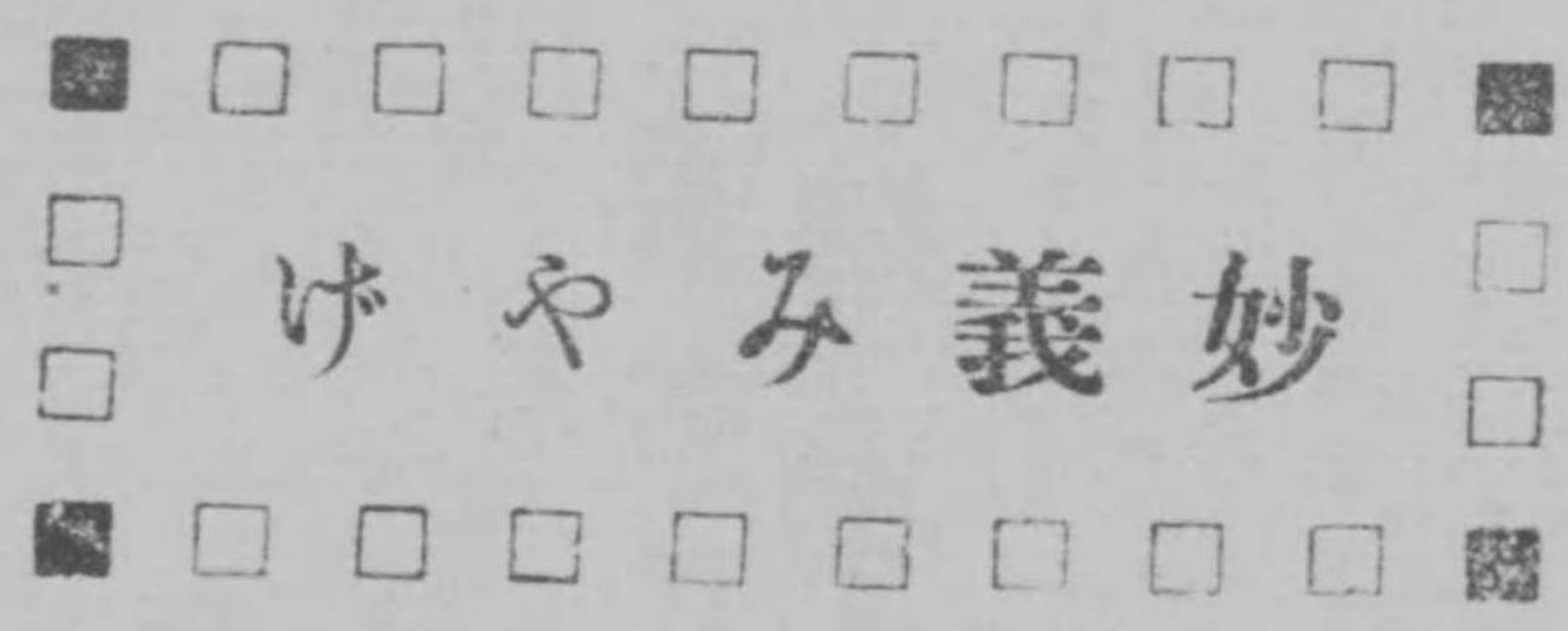
上州妙義町

新舊兩道之交叉点

妙義山名勝  
 御案内所

玉屋旅館





妙義みやび

元祖

金鶏印純粹葡萄酒

葡萄 よろかん

梅 よろかん

栗 よろかん

上州妙義山中之嶽中央

製造元 御休憩所 小澤葡萄園

御休憩所 繪葉書發行所

中之嶽一本杉

金洞舎

例祭四月初子日  
太々御神樂執行

中之嶽神社

御休 憩所  
社務所

繪圖發賣元  
繪葉書

上州松井田町 (妙義山入口)

港屋

勉強館旅

明星館

坪井あい

電話一六番

妙義登山客

御御御  
案休定  
内憩宿  
所

松井田驛より約五町  
園内に火見櫓あり

勉強  
旅館

上州松井田町四ツ角東一町

酢屋徳七郎

電話二〇番

上州松井田驛前

妙義様名  
御案内所

油屋旅館

電話一九番

磯部製菓合資會社

製造元

上州磯部鑛泉地

大手商店

沼賀兄弟商會

鶴林堂

鈴木堂

味 一 は な  
 か く ー し が  
 べ ー ほ め  
 つ

梨

花

▲第一園

碓氷川の南岸松井田驛より  
 妙義への間道側

月

▲第二園

妙義黒門  
 東方約二町

園

州 上

泉 鑛 部 磯

旅館	旅館	旅館	旅館	旅館	旅館	旅館	旅館
磯	一	東	旭	長	林	磯	鳳
の	新	泉		壽		部	來
屋	館	館	館	館	屋	館	館
料理店	料理店	料理店	旅館	(旅御料理)館	(旅御料理)館	(旅御料理)館	(旅御料理)館
大	公	松	日	樂	興	信	信
藤	園	坂	の		成	泉	泉
軒	亭	屋	出	亭	館	亭	亭

大正十一年十月廿七日印刷  
大正十一年十一月一日發行

定價金三拾錢

編輯兼發行人 寺島平三郎

群馬縣碓氷郡西橫野村大字行田九三三番地

印刷人 川合鐵太郎

群馬縣前橋市北曲輪町七拾八番地

印刷所 上毛印刷株式會社

群馬縣碓氷郡西橫野村大字行田九三三番地

發行所 妙義之峻嶺社

不許  
複製

393  
276

終

